
Break!!

黒亜

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Break!!

【Nコード】

N4093BA

【作者名】

黒亜

【あらすじ】

多才な男、篠崎仁。

彼には秘密があった。

そして、それは新たな脅威を呼び寄せる。

とにかく好き勝手に生きる男の物語。

様々な世界をBreakしろ！

本当に滅茶苦茶な作品です。

計画性もなければ、明確な終わりもなし。

楽しむ方だけどうぞ。

とある未来のワンシーン、つまりはプロローグ（前書き）

なんというか、自分が好きで適当に書いてる作品なので、クオリティーは酷いです。

これに関しては、もう前作の比じゃなく。

活動報告に詳しい注意というか説明も書きますが…
そんな暴走（笑）を許せる人だけ読んでください。

とある未来のワンシーン、つまりはプロローグ

静かな夜だった。

月の光が照らすのは目の前の惨状。

おそらく最悪のファーストコンタクト。

出合いが最悪なら、交わす言葉も。

「

」

俺の目の前に現れた存在。

その出合いは偶然か、必然か。

その存在は俺の日常を大きく揺るがす。

そして、変化していく。

何故こんなにもかき乱されるのだろうか。

それは出会ったものが“異質”だったから。

でも、それだけじゃない。

相手の“異質”は明らかなのに、そう言いきれぬ。

自分でも不思議な感覚、だがそれは確信だったのだ。
どうしてだろう。

ああ、そうか。

俺が“異質”だからだ。

とある未来のワンシーン、つまりはプロローグ（後書き）

ありがとうございました。

このプロローグが後々の主軸なのですが…まだ先ですね。

また、主人公以外にもオリジナルキャラを
予定していますがいつになることでしょう。

適当な男、でもこれ主人公なんだ（前書き）

計画性が皆無なんで、

どう転がるかは自分も分かりません。

気楽に見てください。

適当な男、でもこれ主人公なんだ

あなたは篠崎仁しのぎじんさんのことをどう思いますか？

1年生男子のAさん。

「篠崎先輩ですか？やっぱ、男らしくて尊敬しちゃいますね。男から見てもかっこいい人
っていいんですか？憧れちゃいますね。」

3年生女子のHさん。

「篠崎くんね…なんていうか、不思議な感じ？掴みどころがないっていうんだろうけど、
なんか魅力的っていうか。好きな人もいるんじゃないかな。…え？私？わ、私は違うよ！」

2年生男子のSさん。

「ん？篠崎か。あいつは結構頼れる奴だよ。女子にもモテるはずなのに面白い奴だから、
調子乗ってるバカとかと違ってム力つかないしな。」

1年生女子のYさん。

「篠崎先輩って…あ、分かります。なんかちょっと怖い印象があります。有名な人で色んな噂を聞くので、勿論良いものもあるんですけど…。なんか凄すぎて住む世界が違いますよね。」

人によって、意見は様々ですね。

しかし、全体的にはやはり好意的な意見が多く見受けられます。

さすが学園の有名な人といったところでしょいか。

謎多き人物、まだまだ調べ甲斐がありそうです。

以上、新聞部でした。

.....

ここは聖クロニカ学園高等部。

キリスト教の精神に則ったミッションスクールである。

学年が1つあがり、この新生2年5組も大分なじんできた。

まあ1ヶ月かそこいらあれば、こんなものだろう。

「おっす、篠崎ー。」

「おつす。」

「おはよ、篠崎くん。」

「ああ、おはよう。」

「いつも登校早いよなー。」

「俺より早く着いてる奴が言っなよ。」

「ははっ、確かに。」

朝、登校していつも通りにクラスの皆と挨拶をかわす。
そこに男女や個人での区別は作らない。
声をかけられれば、1人1人に返していく。

「1時間目なんだっけ？」

近くにいた女子に聞く。

「数学だよー…って、篠崎くんがそんなこと聞いて意味あるの？」

可笑しそうに笑われながらそう答えてくれる。

決して彼女が失礼とかではなく、当然笑われる原因が俺にあるのだ。
…うん、でももう笑うのやめてもいいんじゃないかな。

「一応、参考にと思ってさ。」

「篠崎くん、いつもまともに授業受けてないよねー。今日は何するつもりなの？」

別の女子も話題に入ってくる。

「というか、そうなんだよな。」

俺は授業をさぼって、何かしら自由にやっている。

睡眠をとることもあったが、基本はそのときにはまっていることをやる。

「今日はポスター描くつもり。」

「ポスター？」

「ああ、なんか節電をテーマに募集しててさ。採用されたら、色々もらえるらしいから。」

「お金とか……現金とかね。」

「結局、お金しか覚えてないんだ……。」

「篠崎くん、絵も上手いしね。節電かー、ベタに蝋燭をおいてる家庭の絵とか？」

「いや、それじゃ採用されない。ちょっとひねって、イナゴの大群とか描いてみよう。」

「ひねりすぎだよ！もう何を表したいのかも分からないよ！」

「篠崎くんが描いたのを想像したらぞわつとしたよ…リアルすぎる。」

絵の上手さを褒められて、悪い気はしないな。
うんうん。

「なんか得意な顔してるけど、絶対間違った解釈してるよね。」

都合の悪いことは全て聞き流す俺だった。

.....

「では、授業を始めますよ。教科書24ページを開いてください。」

うーん、イナゴは冗談にしてもインパクトが欲しいよな…。
ペンでこめかみをつつきながら、思考を巡らせる。

「それでこの問題はですね…、あのー篠崎くん。」

「何をどうしたらこうなるんだよ……」

放課後になり、俺の周りには何人かの男子が集まっていた。
皆の目は俺の机の上、正確にはそこにあるポスターに向けられている。

「もう風景画っていうレベルじゃね？」

「俺、これが写真だって言われたら信じるわ。」

「そりゃ言いすぎだろ、けど凄いよな。」

街の明かりが作り上げる地上の星空と、それがなくなって見つけれ
れる本当の星空。
そんなことをモチーフに描いてみたら、案外うけがいい。

「まあ、入選確実だろ。」

「ほんと自信過剰とか言えねーもんな……」

「さてと、もう行くか。」

俺はそう言って立ち上がる。

「お、今日はどっちだ？部活か、バイトか？」

「今日は部活だよ。」

「ははっ、部活ね…頑張れよー。」

「ああ、じゃあな。」

俺はそうして礼拝堂の方へ向かった。

適当な男、でもこれ主人公なんだ（後書き）

ありがとうございました。

なんかもう1つの作品と終わり方が

デジャブってるような…

でも次からは全然違うので、はい。

放課後は人助け（前書き）

はないとかのキャラが出てくるのは
もう少し先になります。

とりあえず、主人公紹介を兼ねて
だらだら日常を書きます。

放課後は人助け

「今日も部活やるぞー！」

部室のドアを開けて言い放つ。

よく響き渡ったが、それだけだった。

まあ、部員俺だけだしね。

所属、篠崎仁一名のみ。

それがこの“救世部”だ。

勿論、発案者、設立者、部長も全て俺。

顧問は流石に教師に頼んでいるが、今日はいないようだ。

さて、この部活が何をやるか知りたいたろう。

名前で分かったとか、興味ないとかいう意見はスルーだ。

この部は主に悩み相談、個人的な依頼など、とにかくどんなことでも困っている人を助けることが目的だ。

まあ、要は何でも屋みtainなもんだ。

“救世部”なんて大層な名前はミッションスクールというこの学校の特徴に合わせたまで。

無理矢理にでも宗教的に関連付けてしまえば、基本緩い。

でなければ、部員1人の部活なんて認められるわけがなかった。

「つと。」

カバンをそこに放り投げ、自分専用の席に座る。だが、この部活は俺がいるだけでは始まらない。

ここに生徒相談室”に客が来ないことには活動ができないってわけだ。

これまでに受けてきた仕事についても沢山ある。

些細なことからでかいことまで。

そうだな、例えば：

[illegible]

コンコン

ドアがノックされる。

んー、ノックするってことは後輩か女子生徒の可能性が高いな。

「ふんふん。」

「すみません、失礼します。あの、このこと友達に聞いて、それで……！」

「ああ、焦らないで。話は聞くから、とりあえずそこに座ってくれ
る。」

「はい。」

「一年生だよねー。」

「はい、そうです。」

話しながら、来客用の椅子に腰掛けてもらう。

「ミルクティーとか大丈夫かな？」

「あ、はい。好きです。」

「じゃ、これ入れたから飲んでね。」

「…ありがとうございます。」

「初めてだと妙に畏まっちゃう人がいるから、リラックスしてな。ここは誰でも気兼ねな

く他では相談できないことも聞いてあげるとこだからさ。」

「はい。」

「で、何かな？」

まあ、なんか様子を見れば予想がつかなくもないが、一応聞かなきゃ分らん。

「あの、実は私好きな人がいるんですけど…」

「へえ、いいね。」

やっぱりこの年頃の女の子はそうだな。
予想通りだ。

「それで告白をする勇氣もなくて、でもやっぱり人には相談しづらいことなので…。そのとき友達に聞いたら、ここなら力になってくれるって言うてて。」

「いいよ、詳しく聞かせてみな。」

空になったカップにミルクティーをつぎながら、話しかける。

「あ…はい。あの同じクラスの前の席の人なんですけど、よく話しかけてきてくれて私の話も聞いてくれるので気になってきて。」

「ふーん、じゃあ顔とかが好みってことじゃないのかな？」

「そうですね、話してたら自然と意識しちゃってあんまり外見とかは気にしてません。」

「そっかそっか。」

「でも、私こういうこと初めてなのでどうしていいか分からなくて

…」

「そっか、何かするにはどうしたらいいっていうより、何すればいいかわからないのか。」

「…はい。」

「とりあえず、告白とかは恥ずかしい感じかな。」

「すみません。」

「謝る必要はないって、それが普通だからね。今日は時間大丈夫？」

「え、あ、はい。」

「じゃあ、ゆっくり考えていこっか。大切なことだしね。」

「あ、ありがとうございます…。」

「当分の目的は仲を進展させることだよなあ…連絡先とかは知ってるの？」

「はい、メールアドレスとかは話してるうちに。」

「好きなタイプとかは分かる？」

「それはちょっと…」

「まあ、いきなりそういう話題にはならないか…。でも君可愛いし、相当変わった趣味じ

やなければ告白されたら落ちちゃうと思うけどね。」

「えーか、可愛いつて私ですか？」

「うん、可愛いよ。だから成功させるために一緒に頑張ろうね。」

「……う。あ、あの！今日はもう帰ります。」

「え、でもまだ悩み相談が…」

「いいんです。もう少し考えてみます。本当にその人が好きかよく分からなくなっちゃい

ました。だから、今日は…！」

バタバタと焦って荷物をまとめ始める。

よく分からないが、あまりしつこいのも駄目だ。

「分かった。じゃあまた何かあったらおいで。気をつけて帰りな。」

「は、はい。失礼します／＼／」

.....

そんな感じで恋の悩みも解決したりしたからな。
まあ、なんか中途半端な結果だったけどさ。

最後の方はよく分からないまま帰っちゃったし、上手くいってればいいけど。

「ふう。」

回想してたら手元のコーヒーがなくなっていた。
とにかくこの部活は恋愛相談でもなんでもどんなことでも解決する
ってことだ。

まさに何でもこいってことだな。

コツコツ

不意に足音が聞こえてくる。
どうやら、客が来たようだ。
今日はどんなことが持ち込まれるのやら。

放課後は人助け（後書き）

ありがとうございました。

恋愛相談に来たはずが…

こんなケース一度じゃありません。

誰だって苦手なものはある（前書き）

今回はキャラ紹介も書くこうと思っていますが、
まだオリキャラが出きっていないので、
それまでは断片的に知っていつてください。

誰だって苦手なものはある

外から足音が聞こえてくる。

今日初のお客様だ。

何でももってきやがれ。

「おい、篠崎ー。この宿題やってくんね？」

「・・・・・・・・・・」

机の上に置かれるノートと参考書。

うん、あれだな。

「俺に任せろ！！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「で、なんでその宿題を私のところに持ってくるのかな。」

「なんかすいません。」

急遽持ち込まれた最高難度の依頼。

俺はそれを解決すべく図書室に足を運んでいた。
そこでいつも勉強している3年の灰島先輩、成績もいつも上位のほうらしい。

「いつも持ってくるけど、篠崎くん勉強が苦手なんですよ。」

「だから、勉強の出来る先輩に頼んでるわけですよ。」

自慢じゃないが、俺は勉強だけはてんで駄目だ。

まあ、得手不得手があるのは当たり前だよな。

こういう無理な依頼は今までにもいくつかあったので、全て先輩に協力してもらっているというわけだ。

「君の場合、授業を真面目に受けてないだけでしょうが。」

「だって他のことやってるほうが楽しいんですよ。」

「なら、こういう依頼は受けなきゃいいじゃない。」

「いや、でも困っている人がいるわけですね。」

「こんなの持ってこられて、今まさに私が困ってるんだけど……。」

「そう言いながらもやってくれる優しい先輩が大好きです。」

「ちょ、ちょっと、もう！そういうこと軽く言わないでよね！」

「ほんとに好きですもん、先輩のこと。」

「…ずるいわね。」

いつもこんな感じで引き受けてくれる優しい先輩でした。

先輩がやってくれている間は俺も近くの席に座っている。

雑談しながらでも灰島先輩の手は止まることがないので、俺も話しかけながら暇を潰す。

それも迷惑がる様子なく受け答えしてくれる先輩はやはり良い人だ。

「篠崎くんって結構色々こつこつやってるよねー。」

「まあ、そうですね。」

「でも報酬とかもらってるわけじゃないんでしょ？」

「ていうか、そんなことしたら客来なくなりますから。」

「そこはちゃんと分かってるのね…。」

「それに俺は俺で楽しんでますし。」

色々理由はあがあるが、実際退屈しのぎにはなっている。

ここから少し離れているが、柄の悪い男3人がおばあさんを囲んでいる。

ああ、あれだな。

「おい。」

近くに移動し、声をかける。

「あ、篠崎さん！」

「お疲れ様です、いきなりどうしたんすか？」

「いや、見かけたから声かけようと思ってさ。道でも教えてあげたのか？」

「あ、はい。このばあさんが迷ってるっていうんで。」

「んじゃ、俺が送ってくるわ。」

数分後：

「で、あれからどうだ？」

「はい、篠崎さんの教えを守って頑張ってるっす。」

こいつら3人は前は普通のヤンキーでウチの生徒にかつあげをしていたりしたので、その

被害者が俺に依頼をしてきた。

そのことを話にいくと襲い掛かってきたので、対処したというわけだ。

そのときからどうやら改心したらしい。

ちなみにこいつらが言ってる教えというのは…

)

一斉に向かってきた3人を一瞬で片付ける。

「なんだこいつ、めちゃくちゃっええ…」

「これに懲りたらウチの生徒からはかつあげすんのやめときな。」

「くっ…」

「別にお前らが何をするかは勝手だ。ただ男だったら、かつこいい生き方しな。何をかつ

こよく思つかは自由だけど、俺は無抵抗の奴を追いつめんのは好かねえな。」

)

どうやら、あの説教もどきを教えとか思い込んでるらしい。
まあ、いいけどな。

「篠崎さんにまた会えるなんて感激っすよ。」

「別にそこまでじゃないだろ。」

そのあと適当に雑談を切り上げて、帰路についた。

.....

「ただいまー。」

家に着いたときのお決まりの台詞。
だが、そこに“おかえり”の言葉は続かない。
何年も前からそれは変わらないことで。

棚に立てられた写真に目を向ける。
そこには見慣れているけど、もう二度と見られない笑顔がある。

「…ただいま。」

首もとのペンダントを握り締める。

高級感なんて全くないただのひもに透明な石がぶらさがっているもの。

冷たくても確かに温もりを感じる。

「さてと、バイト行きますか！」

誰だって苦手なものはある（後書き）

ありがとうございました。

ちょこちょこ主人公の情報を出していつてますね。

前作のように謎で引く張らないので

そこはご安心を。

あと、今話の登場キャラで何か気づいた人は鋭い。

嫌われ者で人気者（前書き）

早くはないやバトルを書きたいです。
しかし、この前置きも結構
大切なんで仕方ありません。

嫌われ者で人気者

次の日も授業が終わればすぐに部活である。

いつものように生徒相談室に向かうが、ドアの前に人がいた。知り合いではないと思うのだが…こんな早くから客か？

「ここに用？」

「篠崎先輩ですね。私、部活調査という1年生の授業の一環でこの救世部を担

当することになりました。今日一日見学させてもらいます。」

ああ、そんな話されたっけな…。

…されてないな、でも嘘じゃないだろう。

「じゃあ、とりあえず入りなよ。」

「失礼します。」

「適当にかけていいからね。」

「失礼します。」

そのまま立っていたので、椅子に座るように言う。で、最初っから気になってることを聞こう。

「なんでそんなに不機嫌なのかな。」

そう彼女は終始むすつとしていて、言葉も早口だった。

「はずれくじを引いたからです。こんな小さい部活まで対象になっているなんて。」

「それは…まあそうか。」

「それに私は篠崎先輩もあまり良く思っけてません。先輩については評判のいい噂もお聞きますが、不良グループの溜まり場の学校に乗り込んで潰したとかいう話も聞きますし、正直野蛮だと思います。」

あー、またこれか。

俺は部活で色々な依頼を受けてきた。

中には 高校の奴らに大事なものをとられたから取り返して欲しいというものもある。

実際にそういうことは何度かあるが、噂には尾ひれがつくものだ。今の話だって、俺は話し合いに行っただけでほぼ全校生徒で襲い掛かってきた

のはあちらなのだが、それを倒してしまった俺がどう言おうと無駄

だろう。

そんな噂もあるせいで一部の先生からは怖がられていたりする。数学の新人の先生とか特に怯え方が半端ないもんな。けど、仕方ないことだ。

「気の毒だけど、今日一日我慢してくれな。」

「あ、はい。」

（てっきり言い返してくると思ったのに…）

「ていうか、客来るまでは基本暇だから。この部活。」

「そうですか…」

「これでも食ってな。」

「なんですか、これ。」

「何ってサンドイッチだけど知らない？」

「いえ、そういうことではなく。なんですか。」

「だってすることないでしょ。紅茶と一緒にティータイムってことで。」

「はあ…いただきます。」

遠慮するかと思ったが、意外にもすんなり受け入れてくれた。
サンドイッチを手に持ち、一口食べる。

「あ…美味しい。」

「それなら良かった。」

「でも、これ食べたことない味…。どこに売ってるんですか？」

「いや、俺が作ったんだよ。オリジナルソースだから。」

「えっ！これ先輩が…、もういりません！」

「別に気にすんなよ。確かに俺のことは嫌かもだけど、それが美味しいのは食材のおかげなんだからさ。」

「……なら、食べます。」

ふてくされたような顔をしながら、またサンドイッチを手に取り直す。

その後は止まることなく、美味しそうに食べてくれたのだった。

「…誰も来ませんね。」

「まあ、こういう日もあるから。」

「さっきから何やってるんですか？」

「ゲームだよ、ゲーム。」

後ろから画面を覗き込まれる。

「なんですか、これ…。女の子が出てきて…」

「恋愛ゲームってやつだよ。」

「先輩、そんなのやるんですか。」

「好きなんだよ、これだけじゃなく他のもほとんどやってきた。」

「なんか、本当にイメージが変わりました。」

「それは良いことなのか？」

「…さあ。」

言葉は素っ気なかったが、最初のような敵意はなかった。

「すみません、失礼します。」

そうして適当に時間を潰して過ごしていると、やっと客の来訪だ。

見た感じ、どっかの運動部の1年男子ってとこか。

「篠崎先輩、これから練習試合なんですけど助っ人に入ってくれませんか？」

「何部だ？」

「サッカー部です。二年対一年の試合でこちらは1人誰でも助っ人を呼んでいいと言われたので、運動神経がいいと評判の篠崎先輩に。」

「よし、分かった。すぐに行こう。」

「ありがとうございます！」

早速外に出ようとして、一度振り返る。

「どうする、来るか？」

「一応見学ですから。付いていきます。」

そうして、後輩も連れてサッカー部へ向かった。グラウンドには他の部員が集まっていて、もう試合を始める準備はしているらしい。

「おー、やっと来たか…って！？まさか篠崎が助っ人かよ。」

「よろしくー。」

「誰でもいいと言ったけどよ。こいつが来るとさ…」

言い終わる前にまわりから声が聞こえてくる。

「ねえねえ、篠崎くんがサッカーの試合出るらしいよ。」

「え、絶対見に行かなきゃじゃん。」

「今から始まるってさ。」

「わあー、頑張ってー！」

そんな様子を端で見学している後輩は見ていた。

（本当に人気あるんだな、先輩。）

だが、盛り上がるまわりとは裏腹に篠崎と対戦しなければならない
二年生たち

は真剣だ。

キャプテンがチームメイトに喝を入れる。

「おい、気合い入れろよ。絶対引き分けで終わらずぞ。」

「え、引き分け？」

「あー、お前篠崎と試合したことないのか。あいつがシュートを打つのは俺ら

が得点した分だけだ。だから、アシストで入れられないようにして引き分けに

すんのが、俺たちの最高の目標だ。」

「そんな…絶対カウンターってわけじゃないんだし、大げさな。」

「…やればすぐに理解できる。」

キャプテンは口で言っても無駄だと考え、口をつぐんだ。

「じゃあ、始めよう。」

2年生たちは1年生相手の練習試合とは思えない真剣さ。試合開始のホイッスルが鳴った。

嫌われ者で人気者（後書き）

ありがとうございました。

次回くらいでちよつと主人公の
力を書けるといいですね！。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4093ba/>

Break!!

2012年1月14日15時51分発行